鬼斬り紫苑

上田ながの

表紙イラスト：みかん。

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『鬼斬り紫苑』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

鬼斬り
紫苑
上田ながの
表紙／みかん。
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

みなせしおん
水瀬紫苑

剣の腕は確かなのだが、幼いころから剣術一筋で育ってきたため、性に関しては極めて未熟な少女。身体の方も発展途上の完全な幼児体型。

水瀬紫苑が鬼退治などという危険な仕事を引き受けたのは、別に生活が苦しかったからというわけではなかった。いや、確かに生活資金を賭けに使ってしまい、ここ三日ばかりまともな食事にありつけていなかったのも事実ではあるが……。

しかし、賭け事も紫苑から言わせれば仕方がない事なのである。

「傘はりの内職でもらえる給金なんてたかが知れてるからね。あれっぽっちを生活に当てたって、美味しいものが食べられるわけじゃないし……借金の返済もあるから。だったら、それを元手にお金を増やすほうがよっぽど建設的ってわけ」

というわけだ。それで負けていては世話ないが……。

まあそういうわけで確かに生活は苦しかった。だが、あくまでも鬼退治の理由は、苦しんでいる人々がいるからである。

鬼は夜になるたび人里に下りてきては、男を喰らい、女を犯していた。之(これ)までに一体何人犠牲になったか分かったものではない。困っている人々を放っておけない性格である紫苑が、鬼退治を頼まれて断れる筈もなかった。

(それに……仕事が上手くいけば、道場の宣伝にもなる)

紫苑が師範を務める水瀬道場は、今は亡き父から受け継いだものである。父が生きていた頃は、それなりに活気があった道場なのだが、紫苑に代替わりしてからというもの、あれよあれよという間に衰退し、今では一人の門下生も存在してはいなかった。

之も仕方ないといえば仕方ない事だったのかも知れない。

何せ紫苑は女だったから。しかも、年齢は十代半ばで、背も小さい。身体の凹凸も少なく、一見すると、というか実際子供でしかなかった。その上、実は道場には父が残した多額の借金があり、返済を迫る嫌がらせも多数あった。弟子の家にまで取立てが行なわれた事まである。之では門下生がいなくなっても何も不思議はない。そして門下生がいなくなれば、収入もなくなってしまう。

月謝がもらえない以上、紫苑自身が何らかの仕事をしなければならなくなるのは当然だった。だからこそ、自分の剣の腕を活かして用心棒などをしようとも考えたのだが、小さな少女を雇ってくれる人間などどこにもいなかった。だったら剣以外の仕事をすればいいという話にもなるのだが、剣士としての矜持がある以上、それはできなかった。紫苑にとって傘はりの内職が精一杯の妥協である。

（この仕事は絶対に成功させてみせる！）

というわけで鬼退治に対する意気込みは、半端なものではなかった。

「やめたほうがいいよ。危ないって。あの鬼だよ……之までだって鬼に挑んで帰ってこなかった人も大勢いるって話だし」

「お上だって手が出せないんだぞ。よしたほうがいい」

紫苑は近所の人間に何故か人気がある。だから誰もが紫苑の行為を止めてきた。実際彼

等の言葉通り、危険な仕事であった。紫苑なんかに仕事が回ってきたのも、誰も引き受けなかったからである。しかし、紫苑は彼等の言葉に耳を貸さなかった。

「大丈夫だよ。鬼は必ずあたしが退治して、皆が安心して眠れるようにしてあげるからさ」

カラカラと自信満々に笑って、父から譲り受けた備前包平（びぜんかねひら）を叩いてみせた。

「鬼なんかに負けるような柔な鍛え方はしてないって」

誰にも負けない。父の剣が負けるなど、思いもよらなかったのである。

＊

「ここが鬼の棲家か……なかなか趣（おもむき）あるじゃないか」

鬼が住まう山中の洞窟を、紫苑は一人歩いていた。暗闇の中、提灯（ちょうちん）の明かりだけを頼りに進んで行く。一歩一歩足を踏み出すごとに、足音が響いた。漂う冷気が肌に纏わりついてくる。時折鼻をつくのは血の臭い……。

それでも少女剣士は不敵な笑みを浮かべ、肩で風を切るようにノシノシと歩きながら、奥へ奥へと進む。背中で一纏めに結んだ黒髪が、ゆっくりと揺れた。

「で、あんたが鬼ってわけね」

やがて紫苑は洞窟内の少し開けた空間に辿り着いた。壁面には幾つか篝火のようなものが焚かれ、かなり明るい。

「……なんだお前？　餓鬼が来るようなところじゃないぞ」

そこには一つの巨大な影があった。空間のほぼ中央に腰を下ろし、人間のものと思われる骨をしゃぶっている。間違いなく人以外の何かだった。

「餓鬼って言うな化け物！　あたしはね、あんたを退治に来たの。散々街を荒らしてくれたお礼って奴よ！」

言いながら少女剣士は備前包平を抜いた。明かりを反射して、刀身が鈍く輝く。それを見て、一瞬鬼は瞳を丸くした。かなり面食らっている。

「退治？　お前が？　この俺を？」

といって硬直した後、ゲラゲラと笑い出した。耐えられないといった様子で、腹を抱えて爆笑する。

「わ、笑うな！　何が可笑しい⁉　わ、笑うなよ！」

この様子は紫苑の矜持を傷つけるには十分過ぎるものだった。少女剣士は顔を真っ赤にして、ブンブンと刀を振り回す。すると鬼は笑うのをやめ、心底同情するような、哀れんだ視線を向けてきた。

「お前みたいな子供がなぁ。はーあ、笑うなってほうが無理だろ。たかが人間の餓鬼に何ができるっていうんだ？　もう少し頭使ったほうがいいぞ。ま、もうここに来ちまった時点で遅いんだが……死ぬほど後悔する事になるぞ」

ニタニタ笑いながら、鬼がゆっくりと立ち上がる。洞窟内に広がるのは巨大な影。小柄

な紫苑より一回り……いや、二回り程は大きい。腕の太さだけで、紫苑の胴回りくらいはありそうに見えた。普通の人間であれば、この体格差だけで逃げ出してしまっている事だろう。

だが、紫苑は一歩も怯まなかった。

「五月蝿い！　後悔するのはお前のほうだ！　みんなの仇は私が討つ！」

それどころか剣先を鬼へ向け、殺気を迸らせる。

『いいか紫苑。困っている人を見捨てちゃいけないよ。お前は私の……武士の子なんだ。女であっても剣を握る以上、お前もまた武士――侍なんだ。弱い者を守れる強さを身につけるんだよ』

父親の教えが甦ってくる。こんな考え方だったからこそ、父は人の借金まで背負う事になった。そのせいで今の紫苑は苦労している。それでも、父を尊敬する気持ちに揺らぎはない。

（やるよ父上。今こそあたしは父上の教えを果たすんだ！）

亡き父に言葉を捧げると同時に、タンッと少女剣士は地面を蹴る。

確かに今の水瀬道場に弟子はいない。子供――しかも少女が師範では当然の事だ。だか

顎が外れそうな程に、少女剣士の唇が開かれる。口端からは唾液が漏れ出し、顎を伝って流れ落ちていった。口腔に熱く、苦味を伴った異物感が広がる。気道に蓋をされていくかのような感覚だった。呼吸さえも阻害されてしまう。

（こ、これ以上は駄目だ！）

こひゅっ！　んじゅじゅぅっ！　びゅぶっびゅぶぶっ！

「ほごっ！　んじゅっ！　ちゅぶぅっ！　んもももっ！」

苦しみから逃れる為、肉棒の侵入を止めようとする。口唇で肉胴を挟み、カリ首に舌を絡ませた。舌で男根を押さえつけようと考えたのである。が、そんな抵抗は逆効果にしかならない。

「おいおい、そんなに欲しいのか？　急に口を動かし始めやがって。だったらその期待に応えてやらないとな」

舌を動かしたところで、肉棒に対する刺激にしかならなかった。

「ひがっ！　きたひなんかしへな――んぼっ！」

必死に紫苑は敵の言葉を否定しようとしたが、時は既に遅い。興奮した鬼が、之まで以上の激しさで腰を突き出してくる。喉奥を突く、巨大な肉頭。瞳孔が開いてしまったのではないかという程に、瞳が一瞬見開かれる。意識さえも僅かではあるが飛んでしまった。

「おぼっ！　げぼっ！　げぼぉっ！」

えっちシーン試し読み ここからスタート!

肉棒を咥えたまま、何度も咳き込む。眦（まなじり）には涙が溢れた。
「さあ、お楽しみはここからだ」
巨棒で突き殺されてしまうのではないかとさえ紫苑は思ったが、鬼にとって之はまだ始まりに過ぎなかった。好色そうに口元を歪めると同時に、何度も腰を振り始める。発情した獣のような腰の動きで、少女剣士の小さな口を突きまくってきた。
小さな頭が何度も前後に揺れる。
ぶぼっぶぼっぶぼっ！　ぶじゅっ！　じゅぶぶ、じゅぶりゅっ！
「んごっんごっんごっんごっ！　うぼえっ！　んぶぇええっ！」
まるで玩具のような扱い。喉奥を叩いた肉棒が、半分程引き抜かれたかと思うと、再び食道に向かって突き込まれた。口唇が外に捲れ上がり、内側に巻き込まれてくる。苦味を伴った先走り汁が、口腔粘膜に絡み、溶け、少女の味覚を痺れさせた。
（し、死ぬ……死んじゃう……口が、あたしの口が鬼のもので引き裂かれちゃうよ……）
眦に溜まっていた涙が、自然と流れ落ちる。
「おいおい、泣いてるぞ。それでも剣士かぁ？」
それさえも鬼を喜ばせる一因に……。
じゅずっずじゅっじゅずっ！
「ほむっ！　と、どまっで、だま――こほっ！　んもぉっ！」

一突きごとに肉棒は大きさと硬さを増していく。臭いと熱も増していき、竿がブルブルと震え始めた。

「いいぞ。ああ～たまらん。もう射精るぞ。たっぷりお前の口の中に射精してやる」

言葉と共に、鬼は腰振り速度を更に上げて来た。

（だ、射精す？　何を？　ま、まさか！　い、いやっ！　それだけは駄目だ！　絶対にいやだぁっ！）

射精の意味くらいは紫苑だって知っている。だからこそ血の気が引く。先程以上に口唇や舌に力を入れ、敵を止めようとした。押さえられたまま必死に首を横に振るのだが……。

それらの行為はすべて無意味に終わる。それどころか、余計に肉棒を刺激する結果となり、亀頭部が今にも破裂してしまいそうな程に不気味に膨れ上がった。

「射精すぞ！　射精すぞぉ！」

「だむぇっ！　ひゃめっ、ひゃめ――ほぼっ！　んむぼっ！　ぐるっじ……ちゅぶっ！　んぶちゅっ！　じゅぶぅっ！　んんんんっ！」

鋼のように男根が怒張していく。少女剣士は肉欲を解消する為だけの道具でしかなかった。肉茎が何度も痙攣を繰り返し、そして――。

ぶびゅぼっ！　びゅぼっ！　びゅっぼびゅっぼびゅっぼびゅっぼおおおおっ！

「んぶえっ！　ぶふえっ！　おぶっ！　で、でっへる！　んぶっ！　ぶふぅっ！　な、な

んっかでっへる！」

肉先が開いた。多量の白濁液が口腔内に放たれる。一瞬で口の中は汚濁汁に塗れていった。強烈な生臭さと、味覚を痺れさせるような苦味が身を襲う。尋常ではない量だった。紫苑の小さな口にはとてもではないが入りきらない。口端から漏れ出し、鼻にまで逆流してきた。ツーンとした痛みが走ると共に、ブピッと鼻の穴から噴き出す。

（ぐ、ぐるじい……まじゅい……口の中、火傷しちゃうよ……）

喉奥まで肉棒を突き入れられながら。頭を押さえられている。逃げる事もできはしない。流し込まれた牡汁によって溺れそうだった。それに、肉体を襲うのは苦しさだけではない。

（な……な、に……？　こ、これって……）

口腔に広がる精臭に、少女の思考が痺れていく。先程与えられた絶頂感にも似た感覚が、全身に広がっていった。性感に火がつき、全身が更に敏感になっていく。汚い液を飲まされただけだというのに身体は反応し……。

「おぼっ！　ぶふっ！　ふぼぉっ！」

全身が甘く震えた。ジュクッと下腹部が熱くなるのを感じる。達してはいないものの、全身を包む肉悦にとろんと瞳が潤んだ。紅潮する頬。自分の身に何が起きたのかも、理解できない。

「ふぅ……最高だったぞ」

ずぶぶぅっ！

「んおぉぁぁぁぁっ！　そ、そっこ、そっこはぁぁぁぁっ！」

巨棒が子宮の中にまで入り込む。ボコリッと下腹部が肉棒の形に膨れ上がった。ピンッと少女の手足先が伸びる。

「どうだ？　気持ちいいか？」

苦しみを更に助長するような言葉が向けられた。

（く……ふっふっ……くや、悔し、い……こん、な、こ、んなば、化け物なん、かに……）

されるがままの自分があまりに情けない。だからといってこのまま敵に屈服するのは、それ以上に屈辱だった。

「う、うるっさい！　ぬ、けっ！　さ、さっさと……あっあっ……抜っけぇっ！」

憎悪を込めて鬼を罵る。

「ああ、そうか……仕方ないな」

ただ、それを受ける化け物の表情は涼しいものだった。紫苑の罵りに頷きながら、子宮壁まで到達していた肉棒を引き抜き始める。

じゅぐっ！　ぶじゅぐぐぐぅっ！

「おひっ！　ひ、ひっひっひぃっ！　ぬ、ぬっかれる！　あ、あたっしの、な、ないぞ、内臓ぬっかれるっ！　ひぃいいっ！」

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

膣道を拡張していた肉棒が、カリ首で媚肉を引っかけながら抜かれていく。子宮が引っ張り出されそうに感じた。全身が裏返されてしまうのではないかとすら思ってしまう。飛びそうになる思考。チカチカと視界が激しく明滅する。

「う、うごっくなっ！　ひはーひはー！　動くなぁっ！　うご、動かないでぇっ！」

抜けと喚いていた時とは、まるで違う懇願までしてしまう。この時に男根は半分程抜かれていた。肉茎は愛液でねっとりと濡れている。外側に捲り上げられた襞が肉棒に絡みつく様が、異様に卑猥だった。

「まったくお前は我侭だな。俺達はお前の我が侭に付きあっていられる程暇じゃないんだよ」

鬼は止まってくれない。懇願を聞き入れるどころか、再び腰を膣奥へと進めて来た。

ずじゅぼぉっ！　ずごっずごっずごっ！

「んあっ！　あひっ！　あっあっあっ！　おっく、おっくにあたっる！　お、だっめ！　や、やすま、やすめへてっ！　ひっひっひんんん！」

ただ突き入れてくるだけではない。膣奥に入れただけでは満足せず、激しく腰を振り始めた。

処女を失ったばかりの身体には激し過ぎる陵辱が、紫苑を襲う。肢体を拘束された少女に蹂躙から逃れる術はなく、突かれるままに少女剣士は悲鳴を上げ続けた。

じゅごっじゅごっじゅごっ！

膣内を陵辱棒で往復されるたび、紫苑の身体は玩具のように揺らされる。愛液が膣口から周囲に飛び散り、ネトッとした糸が地面に向かって垂れ流れていく。小さな乳房が胴衣に擦れ、勃起乳首に甘さを含んだ刺激が何度も走った。苦しみを押さえる為の愛液がじゅくじゅくと湧き出し、陰唇を淫らに濡らしていく。

「うっご！　うっごいてっる！　な、膣中で、あ、たっしの膣中っで、うご――おっおっおっ！　んあああっ！　とま、とまっで、どまっでぇえっ！　ぢ、ぢくじょうっ！　ちくしょぉっ！」

泣いて懇願する。相手が化け物である事も忘れていた。

（嘘だ。こんなの嘘だぁっ！　あたしが、あたしがこんな化け物なんかに……嘘だぁ！）

自分の置かれている現実が信じられない。何の問題もない筈だった。こんな事になるなんて想像もしていなかった。だから之は夢――現実である筈がない。

だが、そんな考えは現実逃避以外の何ものでもなかった。すぐに少女は現実を突きつけられる。

「お、おっきく、おっきくなってる！　ひっひっひっ！　あ、あたっしのなっかで、お、おっきくなっでる！」

肉棒が膣内で不気味に膨れ上がっているのが分かった。亀頭部が風船のように膨らみ、

膣内から紫苑を圧迫する。膨張の理由はすぐに理解できた。
「おお、射精るぞ！　お前の膣中にたっぷり俺の子種を注ぎ込んでやる！」
残酷な宣告が耳に届く。
「やっ！　そ、それは――それだけはやめてっ！　た、たのっむ！　な、膣中に射精すのだけはやめ――やめてくだっ……んっんっ……さっい！」
胎内に化け物の子種を流し込まれる。考えただけで恐怖に心が凍った。体面や矜持をかなぐり捨て、必死に許しを請う。唾液や白濁液、涙、鼻水まで垂れ流し、顔をグシャグシャにしながら、少女剣士は懇願した。
「駄目だな。俺達に手を出した罰だ」
少女の苦しみは、鬼には届かない。ズタズタに壊された姿すらも敵は喜び、あっさりと懇願を斬り捨ててきた。そして之まで以上の勢いで、肉槍が膣奥に……。
ぶじゅぼっ！
「はがっ！」
子宮が潰されてしまうのではないかという程の力だった。全身が硬直する。次の瞬間、肉先が膨れ上がり、多量の白濁液が少女剣士の膣中に撃ち放たれた。
どびゅぶっ！　どびゅっどびゅっどびゅっどびゅるるるぅっ！
「くひあぁぁあっ！　で、射精てるっ！　あ、あたしの、あたしの膣中にこ、子種……

化け物の子種が――でってるぅっ！」

生温かい汚汁が一瞬で子宮内を埋め尽くす。下腹部が燃え上がりそうな程に熱気を持った。凄まじい嫌悪感が心を押し潰していく。蜜壺に入りきらなかった子種が、ビュブバッとまるで失禁でもしたかのように、膣外に噴き出した。

と同時に、痛みしか感じなかった筈の肉体を官能の波が一瞬で包み込んでいく。先程教えられたばかりの絶頂感が、紫苑を高みへと……。

「な、なんっで？　何でぇっ!?　いっぐ、いやなのに、ばけもろなんかに子種ながしゃれて、いっぐ、いっぢゃうぅっ！　いやっ！　いやぁあああっ！　いっぐ、いっぐぅっ！」

肉悦に身体が耐えられない。ブルブルッと小刻みに腰が震えた。瞳が裏返る。キュッと肉襞が収縮し、陵辱棒を包み込んだ。思考が途切れる。身体中が弛緩し、プシャアッと紫苑は失禁した。

「あへぁぁぁぁ……」

言葉にならない声が漏れる。

（あ……に、にゃんで？　にゃんでわらひ、いっでるの？）

自分でも自分の反応が理解できなかった。

ブジュボッ！

「ふあぁぁあああ」

やがて肉棒が蜜壺から引き抜かれる。巨棒を突き込まれた膣口は開きっ放しになり、子宮口まで見えそうだった。内部からはドロドロとした白濁液が滝のように流れ出てくる。外側に捲れ上がった肉襞もそのまま。先程まで純血だったとはとても思えない程、あまりに無惨な有様だった。

全身を拘束していた触手が離れていく。それでも動く事ができず、蛙のように足を開いたまま、紫苑はヒクヒクと痙攣し続けた。白い肌が桜色に染まっている。紅潮した肉体から溢れ出す汗が、滑るように流れ落ちていく。

「どうだ？　俺達の子種は、人間には強烈だろ？　ただの人間だったら、臭いを嗅ぐだけで達してしまう代物だ。よかったなあ。これからお前は之をたっぷり味わえるんだぞ」

倒れたまま「ひゅへーひゅへー」と息を吐く少女剣士に、鬼が絶望的な言葉を向けてくる。が、それさえも今の紫苑にはどこか遠くの出来事のように聞こえていた。

＊

じゅごっじゅごっじゅごっ！

「そ、そこちがっ！　ぞこちがうのぉっ！　あ、さ、裂ける！　あたひがしゃけるぅっ！」

鬼達に容赦はなかった。紫苑に休む間も与えず、ひたすら陵辱を繰り返す。彼等が肉棒を突き込むのは、膣だけではなかった。口腔を犯し、尻まで穢して来る。巨棒によって肛

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/